

1 研究主題

主体的・対話的で深い学びを創る授業の追究
～授業改善及び学力向上システムの開発を通して～

2 主題及び副題設定の理由

(1) 学校教育目標とのかかわり

本校の学校教育目標は、「夢や目標に向かって、ともに伸びる子どもの育成」であり、目指す子ども像は、「規律あるかかわり合いを通して、自ら考え伸びようとする子ども」である。その達成に向けて、「つながり」を大切にした教育活動を行っている。「つながり」とは、「人と学ぶ」「人から学ぶ」「人へ伝える」と3つの視点を意識し、人とつながり、かかわり合いながら学ぶことが、主体的・対話的で深い学びを創る授業の追究の第一歩となると考える。その中で、学ぶことの意味や価値を認識し、学びに向かう力が育まれていくとともに、互いに支え合い、尊重し合いながら、ともに伸びようとする児童を育てることができると考えた。

よって、学校教育目標の達成に向けて本研究を進めていくことは、有用であると考えた。

(2) 本校で育成したい資質・能力とのかかわり

文部科学省における育成を目指す資質・能力の三つの柱は、生きて働く「知識・技能」、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」である。各教科等において習得する知識や技能を使い、社会とかかわりながら、自分なりの生き方を考えていく力が求められている。

そこで、本校で育成を目指す資質・能力は、「知識」「思考力・判断力・表現力」「共感的な人間関係」「チャレンジ精神」の4つとした。

主体的・対話的で深い学びを創る授業の追究の視点から授業改善を行うことによって、温かい人間関係のもと、ともに伸びようと切磋琢磨しながら学び合い、より深い学びへとつながっていき、資質・能力の育成へとつながっていくと考えた。

(算数科学習を通して育成を目指す資質・能力系統表 別紙参照)

3 仮説

つきたい力(目標)を軸に「めあて」と「まとめ」の設定と工夫をし、「話題」(内容)を具体化させた対話的な授業(方法)を行えば、児童が主体的に学びに向かい、確かな力が付くであろう。

4 研究内容

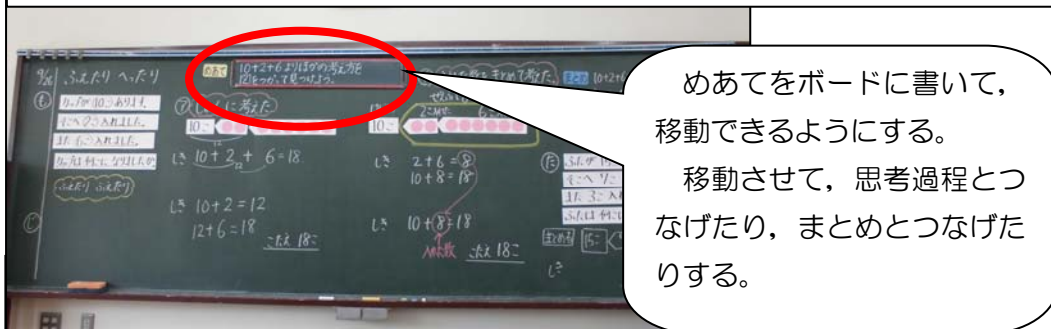
(1) 算数科授業においてこだわる3つの視点

① めあての具体化

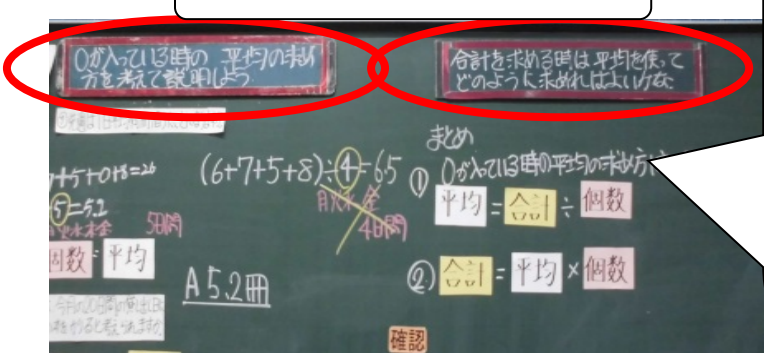
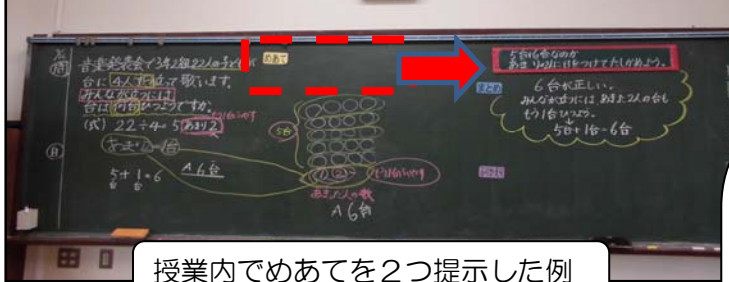
「めあて」で、児童が自ら目的を持って動くことを目指している。
 そのために、「めあて」の中に、方法、手段を入れる。何について・どのように考えるのかという思考の方向性が見えるので自力解決の際、児童は解決しようと課題に取り組むことができる。「めあて」を児童とのやり取りの中から生まれた問いから設定し、児童にとって必然性のあるものにする。

(事例)

3年「あまりのあるわり算」
 めあて：×5台なのか6台なのか、あまりに目をつけてたしかめよう。
 ○5台なのか6台なのか、場面を○図に表しなおしてたしかめよう。
 4年「折れ線グラフ」より
 めあて：×どちらの変わり方が大きいか説明しよう。
 ○たてじくの1目もりの大きさに着目して、どちらの変わり方が大きい
 か説明しよう。



まとめとリンクさせている例



② まとめの整合性

本時の終末にどんな「まとめ」をさせたいのか、理想とする「まとめ」を熟考する。

主語を明確にし、めあてや思考過程と関連付ける。また、多様な表し方、12のポイントを意識して、まとめを考える。児童が自らの言葉でまとめたり、児童と一緒に考えたりしてまとめを行う。

「まとめ」の書き方 チェックポイント

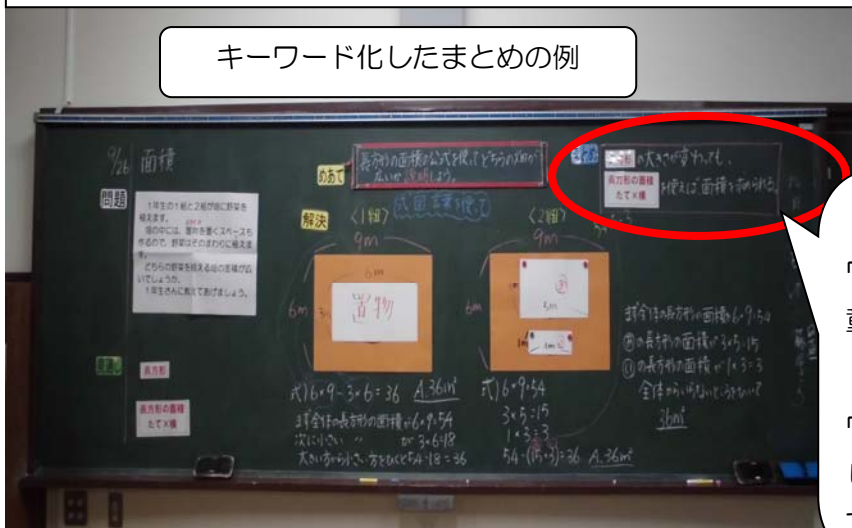
①まとめは「ことば」だけではない。(図もよし)
②キーワードだけのまとめもよし。
③まとめは「箇条書き」にしてもよし。
④まとめは、一般化した方がよい時とそうでない時がある。
⑤「～ではなくて」を使って、強調する。
⑥まとめだけが孤立しないようにする。
⑦練習問題に取り組むこと自体がまとめになることもある。
⑧キーワードをあえて使わずに、まとめを文章化させることもあり。
⑨授業の途中で、小刻みに「小まとめ」を設定する。
⑩教科書以外の言葉を使うときは、慎重に。
⑪めあてをボードに書き、動かしてまとめと対応させる。
⑫まとめをカード化して、繰り返し使う。

(事例)

1年「おおきさくらべ(1)」・・・「まとめ」の書き方③を活用
 「かさをくらべるには、①おなじもののいくつぶんかをはかり
 ②かずのおおきさのちがいをみれば
 おおいかすくないかをくらべることができる。」

2年「たし算とひき算のひっ算(1)」・・・「まとめ」の書き方②を活用
 「一のくらいがひけない時は、十のくらいから1くり下げるとけいさんできる。」

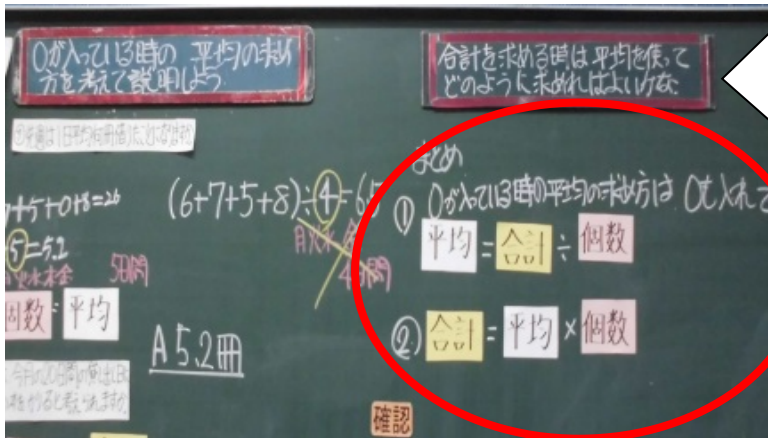
キーワード化したまとめの例



本時で学んだキーワードを使って、児童がまとめをする。

カード化したキーワードは、単元を通して活用することができる。

めあてが2つあった場合のまとめの例



1つのめあてが達成されるとまとめを行い、次のめあてへ向かう。

こうすることで、児童が、今、何を学んでいるのか、何を学んだのかが明確になる。

③ 話題の明確化

児童が主体的に活動を進めることができるよう何について話し合うのかを明確に提示する。それが、協働学習を活性化させ、学びの広がりや深まりにつながっていくよう意識していく。

(事例)

×「自力解決したことをグループで話し合おう。」

5年「面積」

「この式は、大きい三角形からひく方法かな。分ける方法かな。」

6年「速さ」

「1mあたりで求めた数値が小さくなるのは、どうしてだろう。」



ペアやグループで協同学習を行う。

協働学習を行うことで、新たな発見をしたり、自分の考えを深めたりすることができる。

また、「分からないので教えてください。」と言えることの大切さも話している。

5 検証方法と指標

指標1 授業の目標・内容・方法の妥当性

○授業評価表による検証

「授業展開・授業の土台づくり」 参観者平均値レベル 3P 以上

指標2 主体的な学びを促す授業であるか

○児童質問紙を活用した検証

「学びの変革」状況（6項目）県平均値比較 1P 以上 UP

（あ）「国語・算数・理科の授業がよく分かる」

（い）「自分の考えを積極的に伝える」

（う）「友達と話し合い、考えを深め広げている」

（え）「学校では、楽しく勉強ができています」

（お）「学校でみんなと一緒に勉強することは楽しい」

（か）「授業中、自分の考えと比べながら考えている」

指標3 確かな力が付いているか

○単元末テスト（9月）

全国平均値より 1P 以上 UP

○標準学力調査結果（1月）

前年度数値より 1P 以上 UP

40%未満児童数前年度人数より減少

6 研究の進め方

（1）授業研究

① 教材研究の在り方を工夫

○共同教材研究を行う。（1組サークル、2組サークル）

〈パターン1〉

・すべての教科書会社の教科書を見て、つきたい力を明確にする。

〈パターン2〉

・模擬授業を行いながら、授業の流れを考えていく。

② 協議会の持ち方を工夫

協議の柱

○「めあて」は、児童の「問い」から生まれ、主体性を引き出すものになってきたか。（代案を考える）

○めあての解決に迫る「話題」の内容（何について対話するのか）は、明確で適切なものであったか。

2点を協議の柱とし、全員がめあての代案を出し合いながら、グループで協議を重ねる。その際、授業評価表の授業改善ルーブリックをもとに考察し、次時の授業に活かしていく。（授業評価表の授業改善ルーブリック別紙参照）